

まゆだま 通信

News Letter

文部科学省 女性研究者研究活動支援事業

■発行
国立大学法人群馬大学
男女共同参画推進室

〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4-2
TEL:027-220-7146
FAX:027-220-7012
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2014
vol.2

群馬大学女性研究者交流会 第1回 まゆだま会全学ランチミーティングを開催！

男女共同参画推進室 意識啓発 WG
理工学研究院 助教 村岡 貴子

群馬大学男女共同参画推進室では、初めての主催行事として第1回まゆだま会全学ランチミーティングを平成26年1月17日（金）にレストランあらまき（群馬大学荒牧キャンパス）にて開催しました。本会は、平成25年度から3年間の予定で採択された文部科学省女性研究者研究活動支援事業「まゆだまプラン」の一環です。学内の女性研究者（今回は女性教員と修士課程以上の女子学生対象）が分野の違いを越えて情報交換することを目的としており、多分野の女性研究者交流に特化した初のイベントです。

平塚浩士男女共同参画推進委員長（研究・企画担当理事）の開会あいさつに始まり、末松美知子男女共同参画推進室長（社会情報学部教授）からの「まゆだまプラン」の紹介、参加者の自己紹介など、女子学生9名を含む27名が、昼食をとりながら終始和やかな雰囲気の中で交流を楽しみました。本会の企画・運営を担当した工藤貴子同室意識啓発ワーキンググループリーダー（理工学研究院教授）からは、「多分野の女性研究者との交流を強く望んでいる女性研究者が多いことを実感しました。男性研究者との交流を望む声も多いため、今後は男性の参加や桐生および昭和キャンパスでの開催も検討します。次回の交流会も、多くの皆様のご参加をお待ちしています。」とのコメントがありました。



～アンケートから～

本交流会への参加を決めた人の半数以上が、多分野の女性研究者と交流したかったという理由を挙げられており、実際に交流会への参加が有益だったと感じた方の半数以上が、多分野の女性研究者と交流できたことをその理由と答えています。普段、大多数の男性の中の少数派である女性研究者達の隠れた欲求が現れた結果にも見受けられます。

その反面、男性側の意見も聞きたい・男女共同参画に関して男性も交えて考えたいなどの意見から、多くの女性研究者達は男性の理解と協力なしでは自身の活躍は望めないことをしっかりと自覚していることが伺えます。



更に、研究と出産・育児などのライフイベントとのバランスをうまくとっていくための具体的方法を知りたい、またはその悩みを相談したいという切実な意見もあり、この事業の果たすべき役割の重さを再認識させられました。

群馬大学男女共同参画推進元年にあたって



男女共同参画推進室長
社会情報学部 教授 末松美知子

今年が群馬大学男女共同参画推進元年となりました。少し大きさに聞こえるかもしれませんが、科学技術人材育成費補助事業の女性研究者研究活動支援事業に群馬大学「まゆだまプラン」(平成25～27年度)が選定され、男女共同参画推進室を中心に学内で様々な事業が動き出しました。

男女共同参画推進事業は、女性に特化した事業ではありません。女性も男性も、群馬大学で働く全ての教職員がワークライフバランスの取れた充実した生活を送り、教育や研究等で大学に一層貢献できるようになることを目指すものです。大学内のシステムや環境の整備、意識改革などそのための課題は山積みですが、まずは、少数派である女性の声を聞くことから始める予定です。平成25年の女性研究者の在職者比率は14.7%に過ぎず、女子学生へのロールモデルも十分に提供できていない状況です。女性の声に耳を傾け、その声が反映される働きやすい環境を整備することで、着実に女性研究者の増加を目指します。

人類の祖アダムが、妻イブの誘惑により神の言葉に背いて知識の木の実を食べ、エデンの園から追われることになったというキリスト教の父権的解釈は、フェミニズムの立場からすれば許しがたいかもしれませんが、規制の枠や概念にとらわれずに行動する女性の一面を的確に表現しているとも言えます。今後「まゆだまプラン」の実施により、群馬大学のイブ達が、一層自由に教育や研究に打ち込み成果を上げて大学全体の活性化につながるよう、男女共同参画推進室も一歩を踏み出します。

室へのご希望やご意見など、皆様の「声」をお待ちしております。

男女共同参画推進室のホームページができました



3月より当室のホームページが装いも新たにスタートしました。

イベントや支援制度などの情報を随時更新していきますので是非ともご活用ください！

HP:<http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/>

男女共同参画推進室名簿

氏名	職名
末松 美知子	室長 社会情報学部教授
永井 弥生	副室長 広報・ネットワーキングWG リーダー 医学系研究科准教授
工藤 貴子	意識啓発WG リーダー 理工学研究院教授
長安 めぐみ	コーディネーター 支援体制・環境整備WG リーダー 男女共同参画推進室 講師
荒川 浩一	支援体制・環境整備WG 医学系研究科教授
嶋田 淳子	支援体制・環境整備WG 保健学研究科教授
関戸 明子	広報・ネットワーキングWG 教育学部教授
山延 健	広報・ネットワーキングWG 理工学研究院教授
佐藤 美由紀	意識啓発WG 生体調節研究所准教授
村岡 貴子	意識啓発WG 理工学研究院助教
木村 守平	副室長 総務部総務課長
木村 義徳	総務部人事労務課長
福田 美則	昭和地区事務部総務課長
清水 伝次郎	理工学部事務長
森山 校子	総務部総務課専門職員

地図が読めれば楽しい



男女共同参画推進室
広報・ネットワーキングWG
教育学部 教授 **関戸 明子**

『話を聞かない男、地図が読めない女』という本がベストセラーになったことがあります。確認してみると2000年（平成12年）刊行で、「世界21カ国で大ベストセラーになった超話題作」と帯にありました。わたしの専門は地理学です。地理学と地図とは不可分な関係にあります。地理学コースのある大学では、女性は学部生の2割に満たないことが普通で、経験的にも地理や地図を読むことが苦手という女性に多く出会ってきました。

件の本では、男性のほうが生物学的に空間能力に優れており、女性は、地図を回転して進行方向に一致させないと道を進めないが、男性は、頭の中で地図を回転させ、どっちに進めばよいか判断できるとあります。もちろん例外はあり、わたし自身は幼い頃から地図が好きで、いまも地図を頭の中に描きつつ、あちこち走り回っています。

GPS搭載のナビゲーションが普及した今日、なにも考えずとも、目的地まで導かれます。でも、事前に地図を眺めてプランを立てれば、いろいろな経由地を選び、道の途中でも楽しみを見つけることができます。女性研究者というキャリアパスには多様性があります。その道を主体的に選択できるお手伝いができればと思っています。

女性研究者支援事業に携わって思うこと



男女共同参画推進室
意識啓発WGリーダー
理工学研究院 教授 **工藤 貴子**

私は理工学研究院理工学基盤部門に所属し、平成25年度から男女共同参画推進室員として“意識啓発”のための各種イベントの企画や実施に拘わっています。専門は計算化学で、様々な分子の物性や反応性をコンピューターを用いた量子化学計算により研究しています。この分野も御多分に洩れず男性社会なのですが、最近では関連学会でも若い女性研究者の姿を多く見かける様になりました。職場で周りは自分以外ほとんど男性という環境にすっかり慣れていた私の日常は、今回の女性研究者研究活動支援事業の採択後にわかに慌ただしくなりました。大学運営の意思決定への女性の登用という理由で、副理工学研究院長（男女共同参画担当）という肩書きも付いてしまい仕事も増えました。しかし、他の部局の女性研究者との交流の機会が増えたという良いこともあります。男性社会の理工学部でのこの事業の推進にあたっては、今まで仕事上ほとんど意識しなかった“女性”を意識せざるを得ず当然ながら多様な考え方に遭遇します。“女性の視点からの意見”を問われても、いったい何を言えばいいのやらと正直とまどいます。しかし、男女の分類の下に個（々）人がある訳ではなく、個（々）人の下に男女の別がある、つまり“女性”は私の個性の一つと考えて、微力ながら自分の出来る事をやっていきたいと思っています。

着任のごあいさつ



男女共同参画推進室
支援体制・環境整備WGリーダー
講師 **長安めぐみ**

群馬大学の皆様、はじめまして。男女共同参画推進室のコーディネーターとして、3月1日付で香川大学より異動してまいりました。「育み育てる女性研究者支援：群馬大学『まゆだま』プラン」に、末松室長や室員の先生方、室のスタッフの皆様と一緒に取り組ませていただきます。学内で見かけられましたら、お気軽にお声掛けください。どうぞよろしく申し上げます。

医学部附属病院における女性医師支援活動

男女共同参画推進室副室長

広報・ネットワークWGリーダー

医学系研究科 准教授（医学部附属病院医療人能力開発センター副センター長 女性医師等教育・支援部門担当）

永井 弥生

医学部附属病院ではまゆだまプランに先駆けて、女性医師支援活動を行っております。

医師不足や地域医療の崩壊が社会的問題となり、育児中の女性医師の離職はその一因とされています。働き盛りの30代から40代の女性医師の就業率が低下するのは日本に独特の現象なのだそうです。全国的にも関心が高まり、各地で女性医師支援活動が広まってきました。

このような動向の中で、当院では2007年(平成19年)に女性医師支援プログラムが作成されました。このプログラムはフレキシブルな短時間での勤務を可能とするもので、段階を踏んで無理なく復帰をめざす勤務制度を提供しています。同年、院内の保育園も設立され、病児保育にも対応しています。

2011年(平成23年)には医療人能力開発センター内に女性医師等教育・支援部門が設置されました。女性医師支援は女性のみの問題ではなく、周囲の方々に広く関心を持っていただく必要があります。主な



Wind Joy Net Plus Meeting
(女子医学生と医師の情報交換会)

活動のひとつとして、女性医師支援プログラムの有効利用を挙げ、利用者への情報提供、新規利用時や更新

時面談、ニュースレターの発行などによる院内での広報活動を行ってきました。プログラムの利用者は年々増加し、すでに60名を超えています。修了者は34名となり、様々な働き方で勤務を継続しています。このほか、学生や若手医師と先輩医師との交流の場を提供していますが、特に医学科5年生の女子医学生と医師との交流会は好評で、学生さんの将来を考える上での不安や疑問に直接答えていただく貴重な機会となっています。

周囲との連携も重要です。群馬県医師会の提供する保育サポーターバンク制度は利用者が50名を超えました。コーディネーターの方が適切なサポーターを紹介してくださり、病児対応も可能なため、利用者から感謝の声をたくさんいただいています。また、医学系研究科内の医学教育センターリカレント教育部門では、復帰支援プログラムを提供しています。

女性医師支援は、仕事を継続するためだけではなく、女性医師が能力を高め、組織に欠かせない存在となるためのものです。その結果、男女問わず、生き生きと活躍できる職場環境につながります。院内の他部門や地域との連携を進め、さらに群馬大学のまゆだまプランの制度も活用して、これからも働く女性を応援したいと思います。



ゆめの子保育園

あ と が き

第2号のニュースレターでは第1回女性研究者交流会、医学部附属病院における支援活動などお伝えしており、「まゆだまプラン」の本格始動という感があります。更に年度内にはキックオフシンポジウムが控えており、各キャンパスの「まゆだま広場」の準備も着々と進行しているようです。研究支援者など育児支援も既に動き出しています。ゆめの子保育園のような施設が学内にあることを私自身知りませんでした。自分の子供は既に成人してしまいましたが、当時このような制度があったら利用できたのと思います。それぞれのキャンパスの状況なども、この「まゆだま通信」を通してお届けできればと思います。

「まゆだまプラン」では今後、様々な計画が実施される予定ですが、その時だけで終わることの無いよう、継続性を考えながら計画、実施する必要があります。それぞれの制度を作るだけでなく、質を高め、実のある制度にするためにまゆだまプランに対する忌憚のないご意見をお寄せください。

(広報・ネットワークWG 理工学研究院教授 山延 健)